

家庭科住領域における防災教育の授業展開（要旨）

生活創造系教育サブプログラム

21AF901

下田 耕大

【指導教員】 亀崎 美苗 河村 美穂 川端 博子

【キーワード】 家庭科 住領域 防災教育 授業展開

1. 研究目的

日本では自然災害が多く発生しており、地震・津波・台風など多くの災害が起きている。内閣府の防災情報によると今後 30 年の間に約 70%の確率でマグニチュード7クラスの大きな首都直下型地震が発生すると予測されている。地震に加え、近年は台風や豪雨などにより甚大な災害が発生しており、これらの大きな災害に対する防災・減災の重要性が高まっている。

このような状況の中で中学校の家庭科の住生活領域では「災害への備え」に関して学習する内容がある。そこで、家庭科住生活領域において、災害への備えの必要性や災害に備えた暮らしなど、安全で快適な住まい方について改めて考える必要性が高まってきていると考えられる。

本研究では家庭科住領域における防災教育の教材作成、実践を行った。それらをもとに家庭科の防災教育について授業を提案した。

2. 実践の概要

(1) 対象について

対象 さいたま市内中学校 中学3年生

日時 令和5年 1月11日

今回対象とした生徒は中学3年生で、3学期に行う家庭科住領域授業の中で行う内容の一つとして実践を行った。

(2) 授業目的・内容

本授業では「減災」の考え方を中心に授業を行うに当たり教材を作成し、提供した。災害はいつ発生するかかわからず、それを人の力で防ぐことは難しい。そのため「災害の被害を最小限に抑える」という「減災」の考え方が重要になっている。そこで本実践では、今後発生する可能性が高いといわれている首都直下型地震を例に挙げ、その被害を自分たちでどのように減らすのか対策を考え、減災の意識向上を目的とした。

そのために本実践では災害に備えるべきものを自分たちで考えるグループワークを行う。各グループは次のように分け、備える内容や家族構成などいくつかの場面を想定し、話し合いの後に全体で共有を図る。

グループ構成

- A 家の中の対策でできること×幼児のいる家族
- B 家の中の対策でできること×高齢者のいる家族
- C 災害時の非常持ち出し袋×幼児のいる家族
- D 災害時の非常持ち出し袋×高齢者のいる家族

本授業の提案として、自分で対策を行う「自助」だけではなく、国や地域の人々で助け合う「公助」「共助」にも触れたり、自分たちが住んでいるハザードマップを確認し地域の関わり的重要性も学ぶことができるようにした。

また、売られている防災グッズを用意して生徒の前で実際に見せることも行う。例えば非常持ち出し袋の中身を全体で確認し、どのようなものが入っているか、どのように使用するのか実物の確認も行った。

(3) 実践の様子・考察

導入で首都直下型地震のシュミレーション動画を全体で見ただけによって実際の被害のイメージや災害に対する危機感を持った様子であった。その後、実際に自分の家庭で行われている対策を振り返らせた。家庭では食糧の備蓄が圧倒的に多く、一方でそれ以外の対策を行っていない、または家庭で対策をしているかどうか知らない様子だった。

グループワークではそれぞれのテーマについて各自所有しているPCで調べ、全体で共有するために、グループで割り当てられた一枚のスライドにまとめて発表した。生徒は色々なサイトを使って得た情報を精査し、わかりやすくまとめようとする姿が見られた。

このように ICT の重要性が高まっている現在では、生徒が ICT を活用できる授業が大切であるのではないかと考えた。そして、家庭科の授業全体としても ICT 活用がスタンダードとなるようにしていくことが望ましい。

今回の実践は、今後の家庭科の授業形態のモデルとして考えることができる貴重な機会となった。

4. 今後について

現在の日本の状況から、防災教育の重要性が高まっているのは明らかである。学習指導要領の改訂でも防災教育の内容の充実化がすすめられている。

そして、住領域に限定するだけではなく食や衣などの他領域との連携を図り、ICT の活用も踏まえて防災教育を進めることも重要である。

今後は、家庭科の教員として防災を絡めた授業展開の研究・実践の検討を引き続き進めていきたい。

5. 参考文献

文部科学省『学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開』

<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryou/data/saigai03.pdf>

内閣府 防災情報のページ

<http://www.bousai.go.jp/index.html>